

は、アイヌの子どもたちをお風呂に入れたりした。

その「アイヌの村」の中の表現をめぐり、小森龍邦氏から、「宗教者として、よくもこのような表現ができたものだと思うられる位、アイヌに対する蔑視の気持ちににじませている。」と厳しく批判されたのである。時あたかも『同朋社会の顕現』事件で糾弾を受けていた大谷派であった。このような糾弾を受けて、アイヌ民族問題は、大谷派の差別問題として課題化していく。つまり、アイヌ民族問題は、差別問題の課題として、その性格を与えられていったのである。だが、あくまで推測であるが、このような動きのなかで、大谷派の近代史を考察する際に、北海道開教・開拓の実態を把握することが、困難になっていったのではないかと思う。すなわち、大谷派の北海道開教といえば、「大師堂爆破事件」であり、アイヌ民族差別問題が孕まれた問題であり、それは教団が厳しく社会から糾弾された差別事件であり、難しい問題であると考えるステレオタイプな意識は、北海道の大谷派近代史を、意識の上で遠ざけながら、「辺境」に追いやられてしまったのではないかと推測するのである。

大谷派の近代以後を考えると、アイヌ民族差別問題も含めて、「北海道」を抜いては考えられない。二〇〇九年に『アイヌ民族差別に関する学習資料集』（真宗大谷派解放推進本部編）が発刊されたことをきっかけとして、今後、北海道の大谷派近代史について、その丁寧な掘り起こし作業を進めていくべきである。

曾我量深における信の論理

—— 欲生心と逆対応 ——

陳 敏 齡

一、問題所在 曾我量深の思想特色といえば、伝承と己証を軸とするものである。彼は特に親鸞の三心釈の中の欲生心を中心として、他力信仰における主体性の自覚の問題を提起し、「信仰即自覚」という内観の道を打ち出した。本論文では、主に西田幾多郎の逆対応の概念を通して、曾我の信仰神学における欲生中心という宗教的回心の論理を探究したい。

二、真宗教学における欲生心の課題 親鸞の信に関する説明は、『教行信証』「信巻」と「化身土巻」との二巻にわたる。中でも信巻の至心・信樂・欲生という本願の三心が中心である。親鸞は三心即一心のことを論じるが、この一心は信樂あるいは欲生（成就文の「願生」）のいずれに属するか、という異説がある。伝統的な真宗教学は信樂中心であるが、曾我は唯信独脱や観念論的な弊端を批判しながら、受動的信樂より能動的欲生へと力説した。

三、曾我における欲生中心の信仰論理 曾我は生涯の中で、何回も「真宗教相の根源としての欲生我国」の言葉で欲生中心の説を掲げた。特に法蔵菩薩論と同時期の「本願の仏地」の文章で、欲生概念を軸に、真宗の聞信を我と汝との呼応的關係として捉える。第一は信における欲生の問題。欲生とは「如来招喚諸有群生の勅命」というが、如来の招喚と衆生の帰命に分

第7部会

ける。曾我も欲生の両義に沿いながら、特に信における欲生の問題を人間の「宗教的要求」と押える。彼は真の信仰は必ず内に求めていくことを前提に、内観の道程における信願の交際を「宗教的信が内に展開するところの願の世界」と名付ける。第二は本願の招喚と衆生の自覚。如来の招喚をめぐって、如来の心に深く憶いを致す我々の「欲生」の呼び声が即ち如来の呼び声なのだと曾我はいう。一般に、如来の招喚の前に衆生は受動的だと思われるが、曾我は機の徹底的無力のとん底に、招喚と聴聞における主客の関係を逆転する。「呼べとも呼べとも、親が対へない、焉んぞ親を呼ぶところの声その声が親の喚び声であつた」。この主客関係の転換は逆対応の性格をもっているとも言える。第三は欲生における自力他力。曾我はまた善導の「機法二種深信」の説を引用して、欲生における招喚と聴聞との往来関係を説明する。但し、なお仏助けたまえという願いをもつて「信が願を展開するところの一つの方向を示す」ものであるから、たとえ衆生の祈願も自力ではないと曾我は強調する。ここで、欲生の自力か他力の葛藤を軸に、宗教的信は一つ「自覚の原理」として展開すると共に、信の内面における「要求の論理」をも究明する。第四は機の深信と往還二相。曾我は善導の二種深信の説を更に機から法への方向と法から機への方向との二つに分ける。機から法への方向を往相といい、法から機への方向を還相という。往相の上において、機の深信は一応自力であるが、自力の極限において他力を展開する。曾我は法の深信をもつて機の深信を反省して再びそれを見直すことを「還相」という。特に機の深信を還相というのは、自力が他力

に摂せられながら他力を内から制限するが故に、曾我は機の深信を「他力信の還相」と名付け、往相・還相の二面を締めくくる。

四、逆対応と欲生心 逆対応の説は、西田最晩年の「場所的論理と宗教的世界観」で初出する言葉である。これは主に人と神との関係を表現するためであるが、人と神との間における超越と内在という関係も逆対応として取り扱える。曾我の欲生釈は人間の宗教的要求の方から出発する。彼は信の内に求めていく方向を前提に、超越者の内在化の問題を徹底的に追求する。「欲生」における自他の矛盾葛藤の自覚を軸に、宗教的信の内面における「要求の論理」を掘り下げていく。ここに至ると、欲求の背後における先験的ものに眼が開いた。西田はこれを純粹経験という。曾我は法蔵魂という。これは本当の生命の自覚にも繋がる。曾我の動態的信仰論における求める心の喚起は確かに参考に値いする所が多い。

近代日本における仏教と科学

——真宗僧佐田介石を例として——

常塚 聴

本稿は、幕末・明治初頭に活動した浄土真宗本願寺派の僧侶佐田介石（一八一八—一八八二）が展開した仏教天文学の言説を分析することを通じて、近代初期の日本における科学思想と仏教思想の接触の状況について考察することを目的とする。